

雲見の蛙

ゆるやかな起伏が幾重にもつらなる美瑛の丘。白い花を無数に散らばめた濃緑色のジャガイモ畑、黄金色に実った麦畑、ラベンダーの紫の絨毯、そしてヒマワリ畑の黄橙色の帯が北の大地を鮮やかな縞模様で彩る。丘の向こうには夏の入道雲が輪郭を白く輝かせながらモクモクと釜首をもたげている。時が移り収穫が進むにつれて丘の色模様と配色が日に日に変わり、空と大地を分ける丘の端のカラマツの粗林の向こうには、手を伸ばせば届きそうな『ひつじ雲』の高積雲が広がってくる。年によって畑作物の図柄が違い、季節の移ろいとともに変わる色模様を前景とした雲の表情が一瞬一瞬と異なる。

俳人、正岡子規は四季折々の雲を『春雲は絮(わた)の如く、夏雲は岩の如く、秋雲は砂の如く、冬雲は鉛の如く』と文学的に表現している。岩の如き入道雲が鮮やかな色模様で彩られた北国の大地と微妙なコントラストで雰囲気をかもしだす。鉛の如く暗鬱な空から囊まじりの時雨が降りはじめ、いつしか雪アラレに変わると本格的な冬の季節の到来が告げられる。雪雲が次々と陸地へ侵入し

て、六花や角柱の雪の結晶で描かれた『天からの手紙』を下界の私達に届けてくれる。

空の雲は地上へ降りてくれば霧や霧雨となる。厳冬期の内陸地方では細氷というダイヤモンドダストが舞い、過冷却の霧が凍ってできる霧氷が冬枯れの木々を飾る。放射冷却で厳しく冷え込んだ冬晴れの朝、美深や母子里では、柔らかな陽光のなかで極微細な氷のプリズム結晶が浮遊して、まるでダイヤモンドの粉をまぶしたようキラキラと輝き幽玄の世界となる。風が弱く冷え込みが厳しい名寄や富良野そして旭川でも見ることが出来る。

もう一つの冬の風物詩に霧氷がある。冬枯れの木々に白い氷の花が咲いたように霧氷の白装束が枝々を覆う。まるで繊細なガラス細工を思わせる氷の花は、マイナス十数度になってもなお凍らない過冷却の霧粒が枝に触れて凍りついてしまうもので、一ミリの百分の一くらいの霧粒が次々に枝々と衝突してごく薄い氷の皮で包み込み、ガラス細工のような芸術品を造る。木々を飾る霧氷が茜色の朝日に輝く瞬間は実に幻想的で、枝々が触れるカサカサという音色が聞こえてくるようである。四季折々の雲はところを変え、時を変えて刻々と変貌する様々な姿を垣間見せてくれる。

雲を見る目の高さが変われば一味変わった姿をみることができる。ジェット機で飛んだ時の目線では、眼下に雲の絨毯が敷き詰められ、フカフカの雲の上を歩いて空の果てまで歩いていけるような錯覚にとらわれる。窓の外には巻雲が流れ、入道雲も下からモクモクと湧き上がってくる。高度二百キロのスペースシャトルから眺めれば、その入道雲ですら白い薄皮のように地球にはり付き、台風の巨大な雲の渦巻きが青い海に融けこむように浮かんで見えるだろう。

宮澤賢治の童話のなかで蛙が雲見するという話がある。蛙は雲を見るのが大好きで、いつも空を見上げて雲を眺めている。蛙の目は上を向いていて空を眺めるのに好都合だそう。スペースシャトルに乗せた無重力カエルに宇宙から眼下の地球を雲見させたら、目を白黒させてどんな感想をいうのだろうか。

(JR北海道、車内誌エッセイ)

宮沢賢治の「蛙が雲見する」から天気の日和見を職とする私を「雲見の蛙」と称して気象エッセイのタイトルにした。